

「陰陽交」病攷

———付、陰陽交接、陰陽交錯———

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

「陰陽易」に続いて「陰陽交」を考える。『黄帝内経』など諸書に引かれている「陰陽交」の概念と、「陰陽交接」として『医心方』（丹波康頼撰著,984年成書）などでいわれているもの、また『外台秘要方』（王燾、753頃）などの「陰陽交錯」の三種があるようである。まず始めに温熱病と関連する代表的な「陰陽交」から論じる。

1, 陰陽交

『素問』評熱病論篇第三十三に、

黄帝問いて曰く、温を病む者有り、汗出づるにそのたびごと輒に復た熱（有り）、而して脉は躁疾、汗衰えることと爲らず、狂言し食する能わざるは、病名を何と爲すか。

岐伯對えて曰く、病陰陽交と名づく、交する者は死するなり。

と、陰陽交の病名が見られる。この条文の内容を理解するには『黄帝内経太素』卷第廿五傷寒・熱病説の、『素問』とほぼ同様の文に続く、楊上善注を参看すべきである。それは汗は陰液なり。熱は陽盛の氣なり。（通常は）陽盛んなれば則ち汗無く、汗出れば則ち熱衰う。今（汗）出るに熱衰えざる者は是陽耶（=邪）盛ん、其そこに復た陰起まこり（錢超塵校正本は「其の陰復た起こり」の誤りとす）、兩者相交まわる、故に陰陽交と名づくなり。

「交」とは陰陽相交とする理論である。

『靈樞』熱病第二十三の二箇所の条文

(1) 熱を病み已に汗出ざるを得て、而も脉なお躁、喘して且つ復た熱するは、膚に刺す勿れ、喘甚しき者は死す。

(2) 熱病む者、脉なお盛躁にして、汗を得ざる者は、此れ陽脉の極みなり、死す。脉盛躁にして、汗を得て靜なる者は生きん。

(1)は『素問』条文と同意、(2)は無汗であるので、基本病理としているのは「陽盛」のみである。

一方、宋板『傷寒論』辨厥陰病脉證治第十二の

傷寒六七日利せず、便ち發熱して利し、其の人汗出でて止まざる者は死す、陰有りて陽無き故なり。

は、発汗過多の原因としての「陽衰」を論じている。

これらの資料を参看すれば、陰陽共に盛んな病態を云う陰陽交はやはり特殊な状態といえよう。

『素問攷注』の森立之の注、

「陰陽交」の「交」とは是交代の交である。陽熱の邪内に入りて尤も深きを言う。陰血の汗外泄すること太いに甚しく、故に名づけて「陰陽交」と曰うなり。『倉公

傳』は脈を以て之を言う、然るに其の理は則ち一なり。

という論は、「交」を交代と見なすが、楊上善の陰陽共に盛んで相交するという理論の方が理解に及ぶ。

さらに『諸病源候論』(610、巢元方)により病因・病理を見る。「卷十温諸病凡三十四門温病候」には、上記『素問』の黄帝岐伯の問答と同文が記され、引き続いて

人 汗出ずる所以は穀により生じ、穀は精により生ずる。今、邪氣 骨肉の間で交争して汗を得るは、是 邪却き精勝つ、則ち當に食しても復た熱せず、熱は邪氣なり、汗は精氣なり。今汗出でて輒に復た熱するは是 邪勝つなり。汗出でて而も脈が尚躁盛なる者は死す。今脈が汗と相應ぜざるは、此 其の病と稱ぜざるなり。其の死は明らかにして狂言する者は是 志を失う、志を失う者は死す、今 三死を見て、一生を見ず。愈よ必死とは雖も、凡そ皮膚の熱甚しく脈盛躁なる者は温を病むなり。其の脈盛んにして滑なる者は、汗且た出るなり。凡そ温を病む人は二三日身軀熱く脈疾く頭痛み食飲は故の如し。脈直ちに疾きは八日にて死し、四五日頭痛み脈疾く、喜ば吐き、脈來たること細なるは十二日にて死す。此の病 治せず、八九日なるも脈疾ならず、身痛まず、目赤からず、色變らずして反って利し、來たること牒牒として按じて手を彈ませざるも時に大、心下鞣(鞭か?)なるは十七日にて死す。病三四日にして以て下し、汗を得ず脈大いに疾き者は生き、脈細小にして得難き者は死す。治せず下利して腹中痛むこと甚しき者は死す。

とある。ここに見られる考えは、汗は穀精より生じたもので、精が邪に勝ったときに表れるものと見なし、熱は邪盛の結果と見なす。そこから「陰陽交争」が陰陽交の意味とする見方が出てきている。

『諸病源候論』ではさらに「卷二十二霍亂諸病凡二十四門 霍亂欲死候」「卷第三十九婦人雜病三凡四十門 瘧候」「卷第四十一婦人任娠諸病上凡二十門 任娠瘧候」「卷第四十三婦人産後諸病上凡三十門 産後瘧候」「卷第四十五小兒雜病一凡二十九門 瘧病候」「同門 瘧後餘熱候」「同門 患瘧後脇結硬候」「同門 瘧後内熱渴引飲候」「同門 寒熱往來候」「同門 寒熱往來腹痛候」「同門 寒熱往來能食不生肌肉候」にも「陰陽交争」の病名が見られる。一例として「寒熱往來候」を取り上げると、

外には風邪が皮膚に客し、而も内には痰飲が府藏に漬し、血氣を令て不和と致し、陰陽更に相乗剋して、陽勝てば則ち熱し、陰勝てば則ち寒える。陰陽の氣 邪が乗ずる所と為り、邪と正が相干して陰陽交争し、時に發し時に止むは則ち寒熱往來なり。このように『諸病源候論』においては「陰陽交」は「陰陽交争」のことと考えられる。こうして「交代」「相交」「交争」の三つが出てきた。

次に王叔和の『脉經』卷七病可火證第十七を見ると、『素問』条文と同じ条文が見られ、更に

(1) 太陽の病、脉反って躁盛の者は是 陰陽交にして死す、復た汗を得て脉靜なる者は生きる。

(2) 熱病、陰陽交の者は熱煩して身躁き、太陰寸口の脉 兩に衝き、尚躁盛なるは是 陰陽交にして死す、汗を得て脉靜なる者は生きる。

(3) 熱病、陽進み陰退き、頭獨り汗出でる者は死す。陰進み陽退き、腰以下足に至り汗出るは亦死す。陰陽俱に進み、汗出でること已み、熱故の如きは亦死す。陰陽俱に退き、汗出でること已み、寒慄止まず、鼻口氣冷なるは亦死す。(右は熱病陰陽交の部)

と「陰陽交は死」とあるのだが、逆に同巻の生きる場合を見ると

(1) 熱病、所謂并陰の者、熱病已み汗を得て、因りて泄を得る、是は并陰と謂う、故に治す(治^{ある}いは活に作る)。

(2) 熱病、所謂并陽の者、熱病已み汗を得て、脉は尚躁盛、大熱し汗出る。汗出でざると雖ども、若しくは衄す、是は并陽と謂う、故に治す(右は熱病并陰陽の部)。

ここの文を理解するためには、「陰陽并」を理解する必要がある。本シリーズにて次回以降に検討する予定である。

死する陰陽交の意味は巻七では明らかにされていないのだが、さらに『脉經』巻十を見ると、

經に言う、肺は人の五藏の華蓋なり、上は以て天に應じ、萬物を解理し、精氣を行らし、五行四時を法り、五味を知るを主る。寸口の中に陰陽交會し、中には五部有り、前後左右各の所有り、上下中央を主り、分けて九道と爲し、浮沈結散は邪の所在を知る、其の道は奈何。陰伯曰く脉大にして弱なる者は氣實し血虚なり、脉大にして長なる者は病下に在り、浮直を候い上下交通する者は陽脉なり、…。

ここでの用例は、温熱病に関わる陰陽交とは異なるようであるが、王叔和の用語には「陰陽交會」が有ることは指摘できた。

このように「陰陽交」には「陰陽交代」「陰陽相交」「陰陽交争」「陰陽交會」の四種の意味があると言いうるようである。

ここで発汗の病態を考えておきたい。通常概念では、汗=津液=陰液の一部であるから、発汗が多ければ津虚・陰虚になる。ところが宋板『傷寒論』では陰を補う、つまり滋陰をすることはむしろ反対されている。その理由を考えるために、乾姜附子湯の条文を参看することから始めよう。

辨太陽病脉證并治中第六. 太陽病第六十一条

之を下して後、復た發汗し、晝日は煩躁し眠(臥床のこと)を得ず、夜には安靜となり、嘔せず渴せず、表證無く、脉沈微にして、身に大熱無き者は、乾薑附子湯之を主る。方二十四。

下痢に続く発汗という陰液不足状態なのに、何故滋陰をせずに、乾姜、附子という温陽作用を持つ生薬で構成されている方剤を用いるのか?これを理解するためには、本条文の前にある二条文をみななければならない。

太陽病五十八条

凡そ病みて、若しくは發汗、若しくは吐き、若しくは下し、若しくは亡血、亡津液となるも、陰陽自ずから和す者は、必ず自ずから愈ゆ。

太陽病五十九条

大下の後に、復た發汗し、小便利せざる者は、亡津液の故なり。之を治す勿れ、小便利するを得て、必ず自ずから愈ゆ。

のように、第六十一条の状態より一層陰液不足がひどい「亡津液」というものでも、積極的に陰液を補ってはいけないことが繰り返し強調されている。それはいくら釜に水を入れても、かまどに火がなければ蒸気を作ることができないからで、もし乾地黄、石斛、麦門冬などの滋陰薬を用いると、陽気を閉じこめ、湿痰を生み、不可治にしてしまうからであると考えられている。

理解を助けるために、発汗と下痢により失われるものは「津液」のみとみなして良いのかを考えてみよう。そもそも津液が生理的状态で循環している時は、必ず気と共にあり、それが体外に汗や大小便という形で排出された時や、体内にあっても生理的な循環ができず停滞してしまった場合は湿、飲、痰などと呼ばれる病理産物になる。つまり汗や大小便は、単に津液が消耗されるのみならず、必ず気の損失も伴っていると考えるべきであろう。江部¹⁾のように広義の津液=広義の気とみなすことも一連の考えである。

とすればこの乾姜附子湯の条文で考えるべき状態は、気津両方の消耗状態、広義に考えれば陰陽両方の不足状態とみなす必要があることになる。更に気から血や津液が作られるということを勘案すれば、根本的な治療は気の産生を促すことにあると云い得る。故に滋陰薬を用いるのではなく、脾胃の陽気を補う乾姜を、温腎作用を介して脾胃の陽気を補う附子を、気の産生を高めるために用いたと考えることが出来よう。

2, 陰陽交の症例

『傷寒九十論』（許叔微、1149）の「陰陽交證五十六」に以下の症例が見られる。

里に張姓の者有り、傷寒を病む。醫は之を汗し、汗出でると雖も、身の熱は旧の如し。予之を診て曰く：汗を得て身は涼しく脈静かよで喜よく食するは宜し。今 脈は躁にして、身は熱し、食さず、狂言す、病名は陰陽交であり、治す可からざるなり。

引き続き『素問』条文を引用して解説を行っている。ただそれに続く『諸病源候論』の引用文「人 汗出ざる所以は穀により生じ、穀は精により生ずる」に続く部分は、以下の如く字句の異同が見られる。

今邪氣 骨肉に於いて交争して汗を得るは、是 邪 卻しりぞ（=却）き精勝つなり。精勝てば則ち能く食し、復た熱せず。汗は精氣なり。今汗出でて復た熱するは是 邪勝つなり。食する能わざるは、精俾たすけ無きなり。其の壽も立つ可くして傾くなり、果たして半日にして死す。

ここに見られる『諸病源候論』の引用文の方が遙かに理解しやすいし、陰陽交の具体例を知るのに格好の症例である。

3, 陰陽交接

陰陽が男女、しいては房事を意味することがあるのは、前回の「陰陽易」で詳述したが、ここでも同様の用例が見られる。

『醫心方』（丹波康頼、984）卷第一背記に

中極一穴：膀胱（経の）募（穴）なり。…主るは：女子禁中。注に云う：禁中とは合陰陽を得ざるを謂うなり。

曲骨一穴：横骨上に在り、中極の下一寸、陰毛の際に陥る者の中。…合陰陽を惡む。合陰陽とは房事を意味する。卷第七治諸痔方第十五には

『病源論』に云う：諸痔とは、牡痔、牝痔、脈痔、腸痔、血痔を謂うなり。又酒痔有り、肛邊に瘡を生じるは、血出ずる有り。又氣痔は、大便難にして血出で、肛も亦外に出で、良く久しく肯入せず。諸痔は皆傷風、房室不慎に由る。酔い飽(食)にて合陰陽すれば、血氣を勞憂するに致り、而して經脈流溢し、腸間に滲(乞蔭反)漏し、下部に衝發す。痔久しく瘡えざれば、變じて瘻と為るなり。

卷第十治積聚方第一には

『華佗方』云：二車丸、常に尊者の後に一車在り、故に二車丸と名づく。心腹眾病、膈上の積聚、寒熱、食飲の消えざるを主る。或いは憂患喜怒に従り、或いは勞倦氣結に従り、或いは故疾有りて、氣浮いて上に有(在)り、飲食衰少し、肌肉を生ぜず、若し脇に辟在れば、一丸を吞めば即ち消えん。…又治す：女子の産の絶えしを、少腹苦痛し、陽(物)を得て亦痛み、痛みは胸中に引き、積寒の致す所、風子道に入り、或いは月經未だ絶せざるに合陰陽をし、或いは急ぎ尿せんと欲るに合陰陽をし、或いは衣未だ溻(燥)かざるに合陰陽をし、或いは急ぎ之を便著し、濕下従り上り、久しきは長く病む。

また卷第十四治傷寒後食禁第五十八には

『七卷食經』又酒を飲みて合陰陽すれば、復た病み必ず死せん。又生菜を食し合陰陽すれば、復た必ず死せん。

卷第二十一治婦人陰丈夫傷方第十七

『千金方』合陰陽して輒たちまち痛み、忍ぶ可からざるを治する方：黄連六分 牛膝四分 甘草四分 三味、水四升、煮二升、洗之、日四。

『玉房秘訣』に云う：女人 夫により陰陽を過ぎて傷つき、陰腫疼痛を患い嘔せんと欲するの方：

卷第廿七雜禁第十一

『抱朴子』云：陰陽交らざれば傷るなり。

卷第二十八至理第一

『玉房秘訣』云：沖和子曰く：夫れ一陰一陽 之を道と謂う。…黄帝素女に問いて曰く：吾 氣衰えて和せず、心の内 樂しまず、身は常に恐危す、將に之を如何んとす。素女曰く：凡そ人の衰微する所以は、皆陰陽交接の道に傷ればなり。

『素女經』に云う：黄帝曰く：夫れ陰陽交接の節度とは、之を奈何と為すか。素女曰く：交接の道には、形状有り。男致りて衰えざれば、女 百病を除く。心意娛樂すれば、氣力強し。

『玄女經』に云う：人は復た陰陽交わらずして都(=居)る可からず、則ち癰瘡の疾を生ず。故に幽閉して怨み曠ければ、病多くして壽ならず。情に任せ意を恣にすれば、復た年命を伐せん。唯節宣の和を得ること有れば、以て損せざる可し。

4、陰陽交錯

『外台秘要方』(王燾、753 頃、静嘉堂文庫所蔵、宋版)を見ると、卷第四溫病論病源二首にはまず『諸病源候論』を引き「病名陰陽交、交者死」と通常の概念を記すが、これ以外の「陰陽交」を示す字句は全て異なる。まず自序に

陰陽交錯し、榮衛失調す。

とある。また卷第十一卷將息禁忌論一首には、

午後は陰陽交錯し、人腹中亦天に順う時、癥積は成らず、亦能く霍亂す。

とあるが、ここの陰陽は明らかに天気における陰陽を意味している。

また卷第三十九不宜灸禁穴及老少加減法には

黄帝問いて曰く：凡そ大風、大雨、大陰、大寒（の時に）灸するは、灸否口（この文字不分明）、既に灸を得ざるに、何の損益か有らん。岐伯答えて曰く：大風に灸する者は、陰陽交錯す。大雨に灸する者は、諸の經絡脈行らず。大陰に灸する者は、人を令て氣逆す。大寒に灸する者は、血脈蓄滯す。

このように『外台秘要方』では『諸病源候論』の引用で陰陽交の病名が見られるが、他は「陰陽交錯」の字句用例であり、この場合の陰陽は天気に関わるもので、病名としてはふさわしくない。

5. まとめ

1) 『黄帝内経』において、温熱病に際し、発汗後も衰えない発熱、脈の躁疾、狂言を主症状とする病態、つまり陰陽共に病邪が盛んな状態を「陰陽交」と呼び、必死の状態と見なした。

2) 諸家の説によれば、陰陽交には「陰陽交代」「陰陽相交」「陰陽交争」「陰陽交会」の四種の解釈があると言いうるようである。

3) 『医心方』などには「陰陽交接」の意味、つまり房事に関わる用語としての用語が見られる。

4) 『外台秘要方』には、『素問』の用例としての「陰陽交」以外は「陰陽交錯」の字句用例であり、この場合の陰陽は陰陽の原義に関わるものであり、今回のシリーズで取り上げている病名としての用例には該当しない。

【文献】

1, 江部洋一郎：経方医学（1）pp20-21,173-194、東洋学術出版社、1997、市川